

【ポスター発表】

養育里親における里子への接し方

○ 佐賀大学 松山郁夫 (002974)

キーワード：養育里親、里子、接し方

1. 研究目的

養育里親における里子への養育態度は、その健やかな成長や発達に影響を及ぼすものと考えられる。養育里親は、実の親が引き取る見込みのある子供を実親の元へ家庭復帰できるまで、または18歳まで家庭内で養育する役割を有している。したがって、養育里親による家庭的養護は、実親のもとへ子供が帰ることができるように、或いは実親と子供との関係を再構築し、親子関係が永続的なものになるように支援するものであるということを、社会に示していく必要があると言及されている（木村，2012）。このため、里親における養育態度の中でも、日々の生活における里子への具体的な働きかけについて検討しておくことは、養育里親の意義を捉えるためにも不可欠であろう。養育里親には日々の生活の中で、里子の気持を推し量りながら働きかけることが求められる。その際、里子に対してどのような接し方をしているのかが明確になれば、里子との信頼関係を深めたり、生活の質をより高めたりすることに繋がるものと考えられる。したがって、本研究では、養育里親における里子への接し方に対する認識を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

調査対象は、公益財団法人全国里親会の会員である66か所の各都道府県指定都市の里親会に所属する養育里親とした。各里親会の会合時に質問紙調査票への記入を依頼し、無記名で独自に作成した質問紙調査票を郵送により配布し回収した。調査期間は、平成29年1月17日より同年3月17日までの約2か月間とした。養育里親として子供を養育した年数が半年以上ある者のうち、全質問項目に回答している202名の質問紙調査票を有効回答とし、それらをすべて分析対象とした。分析対象者は、男性43名(21.3%)、女性159名(78.7%)、年齢は29歳から80歳で平均55.6歳(SD 9.3)、里親の経験については半年から44年で平均9.7年(SD 8.6)であった。里子への接し方について意識する度合いを問う独自の40項目の質問項目における回答は、「まったく気にしていない」(1点)から「かなり気にしている」(5点)までの5段階評価とした。各質問項目について、等間隔に並べた1から5までの数字のうち、あてはまる数字に○を付けるようにした。

質問項目への回答に対する分析方法として、各質問項目の平均値と標準偏差を算出し、各質問項目についてPromax回転を伴う主因子法による因子分析を行った。また、因子分析によって得られた各因子の下位尺度に相当する項目の平均値を求めた。その際、因子ごと

の項目数が異なるため、算出された平均値を項目数で除したものを平均値として示し、各因子間の相関分析も実施した。さらに、各因子の Cronbach の α 係数を求め、各因子別、及び全体としての内的一貫性を有するかどうかの検証も行った。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮については、一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理規程に則って行った。質問紙調査票を郵送した各都道府県指定都市の里親会に対して、書面にて本研究の目的、内容、回答への記入は無記名で行うこと、回答は個人を特定できないようにすべて数値化して集計するため、里親会名は一切出ないこと等を説明し、同意を得られた場合のみ回答を依頼した。回答をもって承諾が得られたこととした。

4. 研究結果

質問項目 40 項目に対して主因子法による因子分析を行った。十分な因子負荷量を示さなかった 9 項目を除外して再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。各因子の Cronbach の α 係数は第 1 因子 0.92、第 2 因子 0.91、第 3 因子 0.87、第 4 因子 0.84、全項目で 0.96 であったため、各因子別に見ても全体としても内的一貫性を有すると判断された。

第 1 因子はわかりやすいような働きかけをすることに気をつけながら接することを重視した内容であったため、「わかりやすい接し方」。第 2 因子は気持ちを受容するように気をつけながら接することを重視した内容であったため、「気持ちを受け入れる接し方」。第 3 因子は社会性を育てていくように気をつけながら接することを重視した内容であったため、「社会性を育てる接し方」。第 4 因子は自発性を高めていくように気をつけながら接することを重視した内容であったため、「自発性を高める接し方」。以上のように各因子を名づけた。また、因子別の平均値は、第 1 因子 4.01 (SD .611)、第 2 因子 4.02 (SD .568)、第 3 因子 3.70 (SD 0.608)、第 4 因子 4.08 (SD 0.558) であった。各因子間の相関分析を行った結果、各因子の平均値間にはすべて相関が認められた。

5. 考察

第 1 因子「わかりやすい接し方」は、理解できるような働きかけを心がけることで日常生活を自律して行えるようにすること、第 2 因子「気持ちを受け入れる接し方」は、気持ちを受容するように心がけることで里子との信頼関係を深めたり情緒の安定を図ったりすること、第 3 因子「社会性を育てる接し方」は社会適応ができるように健やかな成長・発達を促し、生活が豊かになるように様々な活動を体験できるようにすること、第 4 因子「自発性を高める接し方」は、将来の自立生活に必要な自発性が育つようにすること、以上を心がけていることを表していると考えられる。また、これらは養育里親が里子に接する際の視点であり、4 つの視点を関連させながら接し方を捉えているものと推察される。

引用文献：木村容子（2012）里親制度の啓発と普及についての一考察. *Human welfare*（関西学院大学人間福祉学部研究会），4(1)，27-40.